



TITLE:

アビシニア國王に謁するの記(三)

AUTHOR(S):

小牧, 實繁

---

CITATION:

小牧, 實繁. アビシニア國王に謁するの記(三). 地球 1932, 17(2): 137-147

ISSUE DATE:

1932-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184005>

RIGHT:

- (10) 臺灣全誌 諸羅縣誌の部 卷六、賦役志 戶口土田考 五七頁
- (11) " " " 七四〇頁
- (12) 嘉南大圳新設事業概要 四〇頁
- (13) " " 七三九頁
- (14) 嘉南大圳新設事業概要 五七頁
- (15) 嘉南大圳組合工事計畫說明書 一二〇頁
- (16) 嘉南大圳新設事業概要 一九七頁
- (17) " " 二六三頁

## アビシニア國王に謁するの記 (三)

### 小 牧 實 繁

八月二十五日、日曜日。餘りよく眠られぬ中に六時前早や眼が覺めた。いち早く御寺に行つて見たが少し遲過ぎた。最早や中へは入ることが出来ぬ。七時過宿に歸り、七時半朝食。パンジャム、牛乳、茶、玉子の眼鏡焼等云つたもので平日と變りはない。八時半バシワラッド君、其の友人某氏等と御寺に行つて見る。御勤めは殆んど終つて居て入る事が出来た。バシワラッド君の友人は銃を携へた供を連れて居る。彼は主人が中に入る爲め靴を脱ぐと、ちやんとそれ

を持つて待つて居る。全く草履取りである。アビシニアには今以て封建制度が行はれて居るのである。

御寺の内部には壁畫があるが勿論原始的な異國的东西である。御勤めが濟むと太鼓と鈴の音楽入りで皆んなが踊る。之れは原始的な遺風だと思ふ。此の國は基督教國而も歴史の黎明以來の基督教國であるに拘らず、斯かる遺風、日本の御神樂か何かを思はせる様な原始的な行事を日曜日御寺の勤行に伴つて居るのである。此

これは基督教行事の古い形式を傳へるものではないからうか。此の太鼓は一方の面が他の面の直径より大で長形の壺を横たへた格好をして居るのも妙である。

踊りが終ると坊さんが善男善女にアビシニア語の聖書を教へる。其の中には多くの子供も混つて居る。文字通りの寺子屋である。學校の設備のない此所ではこれが唯一の教育機關であるのかも知れない。坊さんは到底も立派な容貌をして居り、そしてその座つて居る椅子は中々立派な歐風の肘掛椅子である。此所は首府の中でも最も文化の開けた所なのであらう。

御寺を出ると其處には葡萄の實と松脂とを賣つて居るものがある。松脂は香料に使ふんだとバシヤワラッド君は説明して呉れた。

宿に歸る。昨夜よく眠られなかつたのと、天氣が何だか膚寒い位なので床に潛り込み十二時半まで寝る。空は眞黒にかき曇り風が強く全く變な天氣である。こんな天氣は日本でならば別に不思議な天氣でもないが、赤道直下に近い此

のアビシニアで而も八月だと云ふにこんな不思議な天氣を経験しようとは思はなかつた。赤道直下に近いと云つても矢張り高い高い高原の上だからと氣着く。

十二時半中食。食後宿の前庭で休息する。美しい菊の花が今を盛りと咲いて居る。涼しい筈だ。懐しい菊の花を眺め故國の事など思ひながら、今日午後國王に謁して述べなければならぬ挨拶の事など考へる。

室に歸り紙片を取つて今考へ着いた文句を書き着け、數回それを宙で言つて見る。丸で小學校の學藝會の前夜の様であるが、全く眞劍である。尙一回便所へ入つて練習して見る。

三時になつた。燕尾服に着替へる。そして又挨拶の言葉を繰返して見る。

三時半宿の自動車でバシヤワラッド君及びその友人に伴はれて王宮に向ふ。

開かれた第一門に入る。此の門はそんなに立派でもない。第二の門は閉されて居る。合圖によつて開かれた。儀仗兵が銃劍付で並列して居

る。一寸物々しい感じがした。一棟の建物に入る。其處の應接室で約十分間待つ。

其處を出て徒歩で王宮に向ふ。其の間は可なり立派な庭である。王宮は石造で入口も中々立派である。導かれた所は王子の御學問所でテールや黒板などが置かれて居り、算術や其の他の學科の教科書が見出され、又亞米利加地理學雜誌 (American Geographical Magazine) や地球儀などが備へられて居るのも興味がある。聞けば佛蘭西人の家庭教師が傭はれて居るのだと云ふ。國王が到底も教育に熱心であることは勿論である。此處でバシワラッド君の説明を聴きながら更に五分か十分間待つ。

つと侍臣が現れて御這り下さいと云ふ。その合圖で入つた室は可なり大きなサロンである。到底も立派な廣間で板の間には色々の動物の毛皮や何かが敷かれて居る。室に入ると王様が見える。先づ大きく丁寧な御辭儀をして側に近づく。王様はと見ればアビシニア固有の服裝をして嚴然と肘掛椅子に座つて居られる。立派な品

のある容貌の方で態度といひ氣品と云ひ正にエチオピア國王の威嚴を充分具備して居られる。左右の壁に沿つて多くの侍臣が并立し如何にも物々しい光景を呈する。

王様から三米ばかりの距離まで進んで更に一度大きく御辭儀をするとバシワラッド君は初めて私を王様に紹介して呉れる。其處で自分は次の様な佛蘭西語の挨拶を述べる。

日本なる京都帝國大學地理學講師小牧實繁、私がアデス・アベバなるエチオピア國王の王宮に於いて陛下の謁を賜はるを得ましたのは私の大なる光榮で御座います……

其處で王様は何事か言はんとせられた様であるが私は此處で更に大きく御辭儀をして語を續けた。

陛下が全亞非利加大陸に於ける唯一の國王であらせられることは陛下の最大の光榮であると存じます、而して私は日本國天皇の一臣民として今陛下に咫尺し奉り陛下の光榮を頌し奉るのは私の最も喜びとする處で御座います……

此所で王様は非常に満足だと云つた様な態度を示され殆んど微笑されるばかりであつた。私は漸く安堵して語を續けた。

個人的に申し上げまして陛下の國土の火山景觀又その魅力ある自然は私の非常に興味深く見た所で御座います、何故かならば私は地理學者で御座いますから、そして私は尙若干時日滞在致しましてそれを研究し度いので御座いますが、事情がそれを許しませぬことを残念に存じます然しながら私は何年か後には再び御國を訪れることが出来又た此のアデス・アベバに於いて再び陛下に謁見を賜はらんことを切望致し度う存じます。

此れで挨拶を終り又再び大きく御辭儀をする自分は可なり憶せず先づ流暢に話すことが出来たのを喜んだ。

王様が更に流暢な佛蘭西語で話し出された。

「君は黒木領事を知つて居るか？」

私は答へた「私は唯彼の人の名前を知つて居りますばかりで御座います。」

「何時出發する積りか？」

「来る火曜日に出發する積りで御座います、もつと永く滞在することの出来ぬのは残念至極で御座います、然しながら十月には日本へ歸らなければなりません。」

「何處から歸るのか？」

「私はデブチに歸り、ゼネラル・メツサンデエー號で十月三日神戸着の豫定で御座ります。」

「何々の國を訪れたか？」

「合衆國、英國、佛蘭西、西班牙、瑞西、ハンガリー、奧太利、チエッコスロヴァキア、ユーゴスラヴィア、獨逸、和蘭、白耳義、を見てマルセイユから汽船で御國へ參る途中パシワラッド君に會つたので御座いますが、もつと澤山の國々を見ることが出来なかつたことは残念で御座います。」

「それでも中々澤山ぢやないか。」

「難有く存じ上げます陛下。」

そこで又大きく御辭儀をして再び問うた。

「陛下の御家族の御機嫌は如何でいらせられ

ますか？」

王様は答へられた。

「皆んな機嫌がいい、難有う。」

こう言つて王様はアビシニア語でバシヤワッ  
ド君に何事か話された。其處で私は

「それでは陛下私は陛下の御健康と御幸福と  
を御祈り申し上げます、そして何年かの後又陛下  
に拜謁を許されんことを期し奉ります。」と御別  
れの辭を申上げると、王様は

「難有う、そして自分は再び此處に君を見得  
んことを望む。」……

私は丁寧な大きな御辭儀をして退出する。室  
を出る時更にも一度丁寧な御辭儀をすると、王  
様はちつと私を眺めて居られた……

王宮を出る。二十人許の儀仗兵が尙銃劍付で  
整列して居る。今度は謁兵して居る様な氣持に  
なる。

五時半自動車で宿に歸り、七時半まで今日の  
日記を記し、七時半過夕食。十時就寢。空想が  
終に實現した喜びに軽い興奮を覺えつゝ、然し

ながら一方には肩の荷が下りた様な何とも云へ  
ぬ心易さを感じつゝ。

八月二十六日、月曜日。八時半起床。到底も  
非度の雨で空は眞黒であるばかりか八月とは思  
へぬ涼しさである。これがアビシニアの雨期の  
天氣なのであらうか。

九時朝食。食後讀書。又讀書を書く。十時半  
過室の戸を叩くものがあるので開くと其處には  
宿の主人と二人のアビシニア人とが立つて居る  
二人のアビシニア人は白いシャンマを着、その  
一人は大きな見事な象牙を肩にして居る。

ははあ、象牙を賣りに來たのだなと思つた。  
豫ての希望もあるから、何なら御土産に買つて  
歸つてもよい等考へた。然し其れにしては今日  
は宿の主人が馬鹿に畏<sup>カシマ</sup>つて居る。不思議だな  
と思つて居ると彼れが口を切つた。「王様から  
の御使が見えました！」私は答ふべき言葉を知  
らなかつた。すると彼れは語を續けた「貴方が  
アビシニア國訪問の御土産として王様が象牙を  
下さるのです。」

唯夢の様である。一體如何して王様が私の象牙を欲しがつて居るのを御存じなのであらうか私は正に象牙が欲しいと思つて居た、その欲しいと思つて居た象牙をアビシニア國王陛下が余のアビシニア訪問記念の御土産として下さるのかと思ふと唯夢の様である。空想が實現して却て夢の様に感ぜられるのである。私は何と言つて答へていいか解らないのであつた。唯遠くから王宮向つて心の中で厚く感謝の御辭儀をする外に方法を知らなかつた。

御使が室を去ると私は自然と筆と紙とを取つて全く子供の様な氣持になつて故國の父母やその他の人々に此の顛末を報告したのである。

十二時半バシワラッド君が來られ中食を共にする。食後暫らく庭園を散歩し、それから今朝王様からの御贈物の御禮狀を書く。

「エチオピア國王陛下、陛下がアヂスアベバ王宮に於いて私に謁見を御許し下さつた事を感銘の至りに存じ上げます。剩さへ陛下の魅力ある國土訪問の記念として素張らしい立派な御土

産を賜りました事を深く感謝致します。アヂスアベバを去るに臨み私は切に陛下及び陛下の御家族の御健康と御幸福とを祈り又數年の後再び謁見を賜はれることを期します。」と云ふ様な意味を拙ない佛蘭西語で綴つたのである。

四時過、金子引出のため銀行に行く。既に時間後で閉されて居たが、一人のアビシニア人、行員が親切にも五磅丈け兩替して呉れた。總じてアビシニア人は日本人と云へば到底も親切にして呉れるのである。

五時、毛皮屋へ行き、豹と<sup>ヒョウ</sup>鬘狗との皮を購ふ。豹の方は一枚四拾ターレル、鬘狗の方は一枚五ターレルである。餘り高價とは云へぬが、なめて無い儘での値段であるから餘り安いとも言へないであらう。

其れからバシワラッド君の友人が自ら自動車をかつて町の中や郊外を散歩させて呉れる。

ユーカリの森は五十年程前にオーストラリヤから移植されたものであると云ふが今では亭々と茂つて居る。以前は樅の森であつて、此のア

デス・アベバでも獵が出来たと云ふ。アデス・アベバは謂はば新聞の都市であつて、古蹟や名所は無いが、此の新興の都で傳統に捕はれない新政策を行ふのが最近のアビシニア國王の根本方針なのである。

亞米利加の傳導團の病院があるが、可なり立派である。

町の郊外の古い家は大抵藁葺であつて一寸日本の田舎に來た感じを起させるが、新らしい家は石造トタン葺で甚だ詰らない殺風景のものである。此の方がハイカラなのであらうが。

ユーカーリの森の中の旅館に入り夕食前の酒を攝る。中々氣持のよい宿である。主人は私の日本人であることを知るや如何にも物言ひ度げで終に口を切る。

「二年前日本からミッションが來た、總員十四人であつたがその中の黒木領事は此の家に四ヶ月も滞在し、又その中の御醫者は到底もよく病氣を直した、貴殿は日本人なのに何故此の宿に來て下さらなかつたのか。」

暫らく休息閑談をして歸る。道にモハメラシ會社の前を通る。これは前にも記した如くアビシニア最大の商店である。持主はヒンドウであると云ふが成る程中々立派な店である。勿論アビシニアに於ける富者の筆頭は外國人ではなくアビシニア人でその或者の富力は國王を凌ぐとバシヤワラッド君の友人は説明して呉れた。

六時半宿に歸る。再び食前の酒を飲み蓄音器を聴く。一はバシヤワラッド君、その友人、第二の友人等である。此の第二の友人と云ふのは國王の留學生として英國に渡り四ヶ年勉強して立派に卒業最近歸朝した人で、容貌も優れ、皮膚は稍薄黒いが到底も眉目の秀麗な人であり、其の話す所から推しても誠に確かりとした而もインテリゼントな紳士である。

此等の三人は勿論國王の腹心で、國王が新政策遂行の目的から外國に留學させられた人達で辛苦數年の勉學の後何れも最近に歸朝したばかりで、謂はばアビシニアの志士であり同時に新知識であるのである。



其處へ又一人の志士が入つて來た。此の人はアビシニア固有の服裝をして居るが、近く伊太

利駐在の公使として出發するんだと云ふ。當面の問題として歐羅巴滯在中の自分等の服裝を如何にすべきか、歐風に從ふべきか、將又國粹を保存すべきかに就いて盛に議論した。私は明治維新當時の日本を思はざるを得なかつた。エチオピア國王ネグス・タファアリ (Negus Tafari) は夙に英明の譽高く、最近數十年間に於ける日本の異常なる進歩に對して特に大なる興味を有せられ將に明治の維新に相當する様な改革を斷行せんとせられて居る様子がよく窺はれた。

談論風發の所へ王様の秘書が來られ、黄金のメダルを出されて「此れは王様から貴殿に賜はるのである。」と言ふ。重ね重ねの御厚志に唯々感泣の外ない。手に取つて見ると表面には王様の肖像が浮彫せられ、裏面にはエチオピア文字で銘がある。諸氏の説明によると

“Negus Tafari

Herities du Trône et Regent.

## Plénipotentiaire de l' Empire d' Ethiopie.

27 Maskaram 1921 ”

と云ふのであつて、此の最後の記年一九二一年マスカラム二十七日と云ふのは西曆一九二八年十月七日に當るのであると。何だか勳章でも戴いた様な氣がして嬉しくもあり、夢心地がする様である。

七時半過、夕食の卓に就く。此れはバシヤワラッド君等の肝煎りで、バシヤワラッド君の友人の妹君が手料理になつたアビシニア料理なのである。

餘り美味くないホテルの料理、西洋料理の出來損ひの様なものよりは遙かに美味である。先づ雞のスープが出る。そして飲料は純粹のアビシニア産蜂蜜水とアビシニア特有の麥酒とである。蜂蜜水は名にし負ふアビシニアの名物である。甘くない譯がない。麥酒もアビシニア産の小麥から作り之れも矢張り以前からある酒であるが、西洋の麥酒よりは幾分軽い様である。パン

が出る。此れは亦アビシニア特有のもので、非常に薄く扁平で幅廣く、ぺら／＼して居るが中々美味しい。それから牛肉のひき肉と野菜の刻んだのを混ぜたものが出る。此れは日本でも普通に行はれる料理であるが、アビシニア料理では非常に辛い唐辛子粉を入れて食する處にアビシニア的特色が濃厚に現れてゐる。アビシニア人は大いに之れを賞味するらしいが、外國人たる私が上せはせぬかと大いに心配して居る。所が心配所が中々美味しくて止められぬのである。それから馬鈴薯の絹漚し、雞と卵子にトマト・ソースの掛かつたものが出る。これも到底も美味で殆んど満腹する迄食べた。厚くバシヤワラッド君及びその友人殊にその妹君の厚意を感謝したのである。

食後尙暫らく音樂を聴いた後アビシニアの志士諸君と別れを惜み、王様から賜はつた象牙を荷作りせしめ、日記を記して十一時過就寢。

今日も又有益な興味ある一日であつた。アビシニアは決して不愉快な國ではない。アビシニ

ア人は、日本人にと言へば到底も親切で、あらゆる厚意を示すのを知つたのである。バシヤワラッド君はその代表者である。王様が私に特に象牙を賜はつたのは、私が船の中か汽車の中かで象牙の事をバシヤワラッド君に話して居たのをバシヤワラッド君がちやんと記憶して居て、御土産には何がよろしいかに就いて王様から下問せられた時バシヤワラッド君がそれは象牙であると答へたのであることも知れた。因みに此の象牙は一三、四六〇瓦であると同君は言つて居た。バシヤワラッド君の心盡しは并々でなかつたと思ふのである。謁見に就いても王様の比較的暇な日曜日を拜謁日に選んで呉れたのはバシヤワラッド君であつたのである。明日早くも此の國都を去らなければならぬ。かと思ふと残念で仕方がない。

八月二十七日、火曜日。六時十五分起床、顔を洗つて出發の準備をなし、アデス・アベバを去る直前の記念として尙一通の手紙を故國に書く。七時半朝食、宿の支拂を済ます。其處へ三

度王様の御使が見えた。そして私に王様の御眞影を賜はつたのである。縦二四糎、横一八糎の鮮明な寫眞である。唯々感泣の外なく永久に記念として保存し度いと思つたのである。

八時十五分宿を出て驛に至る。ホテルの主人やバシワラッド君、その友などが見送つて呉れた。限り無き名残が惜まれるのである。九時汽車はアヂス・アベバを去る。僅かに數日の滞在ではあつた。然しながらアヂス・アベバの名は、エチオピア國王陛下ネグス・タファリを初めバシワラッド君やその他の親愛なる人々の住む所なるが故に此上なく懐しいのである。何時又此の人達に遭へるのであらうかと思へば感傷的な愛惜の情をさへ禁ずる事が出来ぬ。然らば象牙とメダルと御眞影とに僅かにアビシニアの姿を偲ばなければならぬのであらうか。車窓から遙かに望まれた王宮に最後の訣別の情を表する。王様に幸多かれ、アヂス・アベバの町よ隆えよ！

十時アカキ驛(Akaki)着。此の驛の手前には火山性小丘の上に村があり、火山性洞窟の中に

人が住んで居るのが見える。洞窟は一つではないのである。

十時四十五分ドウカム驛(Doukham)着。丘陵の斜面に家居があり其の附近に多少の蠶豆<sup>ソラマメ</sup>が栽培せられて居るのを見る。此の斜面上の家居と耕地との對照は可なり美しく、殊に乾季の天氣のよい時の風景はどんなによいかと思ひ遣られる。

十二時モジヨ驛(Motjo)着。矢張下車して驛のビュフェーで中食。今日は到底も美味い。同車の一アビシニア人が同卓で私の中食代を支拂つて呉れる。此の仁は矢張アビシニアの貴族で國王麾下に樞要の位置を占め、農政に關する首腦者で先づ農務大臣に當る人であるが、到底も私に親切である。餘り上手ではないが佛蘭西語を操り日本の農業經營や施設に就いて熱心に聞かれる。シャンマを着た此のアビシニア貴人の親切と朴訥さとは又私の永久に忘れることの出来ない所である。驛附近には玉蜀黍が可なり多く栽培せられて居る。

一時四十分ハダマ(Hadama)驛着。此れはア  
ビシニアの停車場としては可なり大きな部に屬  
するもので、農業の中心をなして居ることを  
知る。稍豊富な農作物が驛に集つて居るのを見  
又歐風建築中の倉庫様の家が見られる。

土人の帶劍する者がある。奇妙な事には彼等  
は劍を右の腰に下げて居る。普通とは全く反對  
である。通常彼等は帽子を戴かないが或るもの  
は植物性纖維を以て作つた帽子を被て居り、又  
或者は布を以て頭を覆つて居る。但しその布の

被り方は幾分アラビア人やヒンドウの被り方と  
は異なる様である。劍は直刀で短刀であるが、可  
なり立派なものである。足には歐羅巴風の靴を  
穿いて居る者もあるが、此れは新式で、古式は  
靴ではなく草製の草履であるらしく、此れを穿  
いたものも認められる。勿論靴や草履を穿いて  
居る者は上等の間人で、大抵土人は跣足である。  
服装は殆んど一樣であると云つてよい。即ちシ  
ヤンマである。貧富の差別はそのシヤンマの布の  
材料如何にあると云ふより外はない。(未完)

## 伊 太 利 と こ ろ ぐ (二四)

瀧 川 規 一

【爾餘のツルバズール詩人】

(十九)【リチャード一世】 英國王チャード一世

もツルバズールの一人であつてラング・ドイル  
語及バラング・ドック語の兩語で詩作が出来た

と云はれてゐる。現存の詩は獄中の作で美しい  
詩が只一篇ある。

(廿)【カルヅナル】 ツルバズールの衰退期に  
入つた最初の詩人はペイル・カルヅナル (Peire